

O2-006

NICU入院児の母親の直接授乳開始後1か月の母乳育児自己効力感を高めた要因

中谷 三佳¹、仁尾 かおり²、大林 陽子²¹三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 博士後期課程、²三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻

【緒言】

新生児集中治療室 (Neonatal Intensive Care Unit : NICU) に入院した児の母親の母乳育児継続に、母乳育児自己効力感 (Breast-feeding self - efficacy : BSE) の寄与が報告されている。「赤ちゃんに優しい病院 (Baby Friendly Hospital : BFH)」で BSE への介入効果がみられたが、NICU 入院児の母親の BSE を高めた報告はみられなかった。本研究は、NICU に入院した児の母親の BSE を高めた要因を明らかにすることを目的とした。

【方法】

2018 年 6 - 12 月に BFH を含む周産期母子医療センター 4 施設で、在胎 32 週以降に出生した NICU 入院児の母親 198 名に対し、直接授乳開始 (直母) 後 3 - 7 日と直母後 1 か月に質問紙調査を実施した。2 時点とも回答を得た 104 名 (回収率 52.5%) のうち、直母後 3 - 7 日で BSE 値が 50 点未満の母親 84 名を分析対象とした。目的変数は直母後 1 か月の BSE 値が母乳育児継続のカットオフ値 (50 点) 以上であること、説明変数は社会的・産科的属性、直母後 3 - 7 日までの直接授乳回数、直母後 3 - 7 日の母乳育児意思、母乳不足感 (Perception Insufficient Milk : PIM)、ストレス対処能力 (Sense of Coherence : SOC)、母乳育児サポート、BFH としてロジスティック回帰分析を実施した。

本研究は、各施設と所属大学の倫理審査委員会 (承認番号 U2018 - 005) の承認を得て実施した。

【結果】

対象者の平均年齢は 33.6 (SD4.5) 歳、初産婦 55 名、経産婦 29 名であった。児の出生施設は、BFH24 名、BFH 以外 60 名であった。分析の結果、直母後 1 か月の BSE 値が 50 点以上になった要因は、直母後 3 - 7 日の PIM (OR:1.33 [95% CI:1.07, 1.77]、SOC (1.14 [1.09, 1.63]) であった。

【考察】

NICU に入院した児の母親の母乳育児自己効力感を高めるため、母乳分泌を維持し、過度な母乳不足感を軽減すること、授乳行動を観察し、適切な授乳行動を促す支援が重要である。また、ストレス対処能力が低い母親に着目し支援する必要性が示唆された。

【結論】

NICU に入院した児の母親の直母後 1 か月の BSE を高めた要因は、直母後 3 - 7 日の PIM が低いこと、SOC が高いことであった。

O2-007

後ろ向き Web 調査による妊娠期における低出生体重児 (LBWI) の出産リスク評価尺度の作成

園田 和子¹、小山 記代子¹、山本 弘恵¹、小川 有希子¹、名村 駿佑²、松成 裕子³、根路 銘 安仁³、西地 令子¹¹第一薬科大学、²福岡労働衛生研究所、³鹿児島大学

【目的】

わが国の低出生体重児 (以降、LBWI) の割合は昭和 51 年以降上昇し、2018 年では男 8.3%、女 10.6% となっている。LBWI は、早期新生児死亡率や出生前後の疾病罹患割合等が正常児より高率で、成人後生活習慣病の発症に影響することが解明されつつある (健康と病気の発生源説 (DOHaD 説))。また正出生体重児に比べ育てにくさを感じる親が多く、児童虐待へ移行する危険性を含んでいるのが、ハイリスク児である。そして、妊婦が 2,500g 以上で胎児を出産することができるよう支援することが重要である。以上によりこれまで未就学児の母親を対象に信頼性、妥当性が得られた『妊婦に対する低出生体重児の出産リスク評価尺度 (以降、尺度)』を作成してきた。本研究の目的は、F 県の 4 歳未満児 (以降、児) とその母親を対象に尺度を用いた Web 調査を行い、その有用性を検証することである。

【方法】

2021 年 1 月～7 月に F 県下の 4 歳未満の 713 人の園児の母親らに保育園・幼稚園を介して調査を依頼した。QR コードから調査票にアクセスし、回答後研究者にデータを送信する Web 調査である。尺度を得点化し、属性との比較を行った。大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

110 人 (有効回答率 15.4%) を分析対象とした。児の月齢平均 (±SD) は 2 歳 3 か月 ± 1 歳 2 か月で、平均出生体重は 3028.3 ± 392.9g であった。出産時の母親の平均年齢は 31.7 ± 4.9 歳で、初産婦 36 人 (32.7%) であった。尺度全体の Cronbach's α 係数は 0.730 であった。しかしながら、尺度得点と出生体重児群の 2 群間比較において有意な差は認められなかった。そこで、因子構造の再確認のために、主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果、回転後の因子負荷量が 0.4 以下の項目を含むが、解釈可能な 8 因子 22 項目の最適解が抽出された (抽出後の負荷量平方和累積寄与率 59.1%)、尺度全体の α 係数は 0.721 となった。

【結論】

尺度全体を一つの質問票とする本尺度の内的整合性は、確保されていることが確認できた。一方、尺度の有用性に関しては、尺度得点と出生体重児の群間比較において、平均値の差に有意な差が認められなかったことから、示唆されなかった。その一因として、本研究の対象児の年齢を繰り下げたことが影響した可能性がある。